

跡見学園女子大学学芸員課程 平成25年度学芸員課程について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授

村田 宏

平成25年度の博物館実習の概要はつぎの通りである。

本学の博物館実習は、

- ①春学期における、通常授業時の基礎実習（計16回）、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏期休暇（8月～9月）期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花菱記念資料館を使用した事後実習

の三種類からなっている。

年度当初の見学実習は、府中市美術館（東京都府中市浅間町1-3）で行われた。外側からは窺い知ることのできない美術館の「内部」を参観し、学芸員の方から解説をお聞きしたことは、課程履修生にとって大変有意義なことであった。

当日、見学に参加した履修者の「見学レポート」を記しておこう。

府中市美術館見学レポート K.I.

府中市美術館の印象

府中市美術館は2000年に開館した、まだ13年と歴史の浅い美術館ではあるが、来館者が美術を学ぶ場所として、とても良い空間・雰囲気を作り上げていると強く感じた。また、府中市美術館は他の美術館とは違い、作家と来館者との距離がとても近いという点が印象的であった。作家たちが生み出す素晴らしい作品がどのように制作され、生み出されているのかか間近で見ることのできる空間があり、作家が来館している時には実際に制作しているところの見学や作家との対話もすることができるようになっていた。またワークショップに関しては、子供向けだけでなく、大人向けのワークショップも用意されており、幅広い層の来館者に美術の知識や楽しさを知ってもらえるようになっていた。市民ギャラリーの空間も落ち着きのある場所となっており、一般の作家たちが作品を発表する場として十分な広さを確保してあった。これらのことから、府中市の市民、また多摩地区の区民にとって府中市美術館は、美術を学ぶ場所としてより近い存在であると感じさせられる見学となった。

府中市美術館は収蔵作品の管理・書物の多さにも目を瞠るものがあった。美術館に行っても美術館の表側だけで、裏側を見ることは滅多にない。そのために、府中市美術館の書庫の資料の多さ、収蔵庫の厳重な管理にとっても驚かされたのだと思う。3万数千冊という膨大な資料を1階と2階に分け、書棚にびっしりと納められているところを見て、狭い書庫にこれだけの資料を納め、管理するのはとても大変なことだろうと感じた。さらに、今後も毎年資料を買い足していくことで、書庫がいっぱいになり資料が置けなくなったら、その後はどうしていくのが心配になった。次に収蔵庫に関してだが、以前、一つの大きな部屋に作品を保管しているのかと思っていたが、府中市美術館の収蔵庫は前室があり、さらにその奥に四つの部屋に分かれていることが分かった。この四つの部屋にはそれぞれ日本画、油彩画などの作品が収蔵され、温湿度調整されている。収蔵庫に関して一番驚いたことは、庫内の各部屋がすべて木製であることである。収蔵庫に入る前の周りの場所はコンクリート製であり、収蔵庫も当然コンクリートむきだしの状態を想像していた。そのため収蔵庫のなかは木製と聞いたときは、とても驚き、またとても印象に残った。

企画展の展示方法

企画展「春の江戸絵画まつり かわいい江戸絵画」を見て、興味深く思ったのが章ごとに分けるその手法と、小さな子供でも飽きないような鑑賞方法が工夫されていたことである。まず、章ごとに分ける手法であるが、普段見に行く展覧会では章

ごとに部屋で分け、壁に章の解説パネルを置いているが、府中市美術館の今回の企画展ではひとつの大きなパネルを章と章の境に置き、そのパネルに章解説を置くという手法をとっていた。普段の他館での章の分け方に慣れているぶん、今回の府中市美術館の章立てに手法は面白いと感じた反面、やや見づらいうにも思った。また、もうひとつ印象的だったのが、小さな子供でも飽きないような展示方法と鑑賞方法が工夫されていたことである。展示内容や作品のそれぞれ感じて欲しいポイントを抜き出し、パネルに表記するやり方である。小さな子供に限ったことではないが、章の解説パネルを読まない来館者がいる。章解説を読まない、その章で何を伝えたいのかが分からないことがおうおうにしてあるが、今回の展覧会ではところどころにポイントとなる言葉がパネル化して展示されていた。そのため展示内容を把握しやすく、またとても鑑賞しやすかった。さらに、企画展示室入口で来館者に配っていたクイズ形式のワークシートによって、すべての展示作品が飽きずに鑑賞できるように工夫されていたことも印象的であった。最近では、他の美術館でもワークシートを配り、小さな子供でも展示を楽しんで鑑賞可能となっているが、一枚の紙にただ印刷されているだけのものが多いように感じる。しかし、府中市美術館では子供も読めるように漢字にふりがなをふってあり、イラストをちりばめ、鑑賞する際の注意事項まで書かれ、展覧会をより楽しめるようになっていた。

今回の展覧会をみて、細かいところまで気を遣い、来館者に「この展覧会に来てよかった。」と満足してもらえる展覧会を考えることの大切さをあらためて学ぶことができたと思う。

府中市美術館見学レポート Y.O.

府中市美術館は市民の日常にとけこむことに成功した美術館だ。場所は駅から車で10分以上と、利便性が高いとはいえない。だが、30分おきに美術館へ行くバスがあり、料金も100円と格安なので気楽に利用できる。府中公園に隣接しているため、公園の利用者が立ち寄っていくこともあるだろう。

美術館とは、美術作品などを展示し、これを市民が鑑賞する場所である。しかし、ここには必ず矛盾が生まれる。それは作品保存と利用者の両方にたいする配慮に起因する。たとえば、絵画などの作品は、光や温度、そして湿度に弱い。そのため、美術館は太陽の光などが入らない構造としなければならない。美術館は「陰気くさい」という偏見を持つ人がいるのは、このせいかもしれない。けれども、府中市美術館は、この問題を階ごとに分けることで解決した。

一階は受付やエントランス、講座室、ロッカー、美術図書室（蔵書数およそ3万冊、企画展示に関する資料を特集して展示している）などの設備がある。一階には大型の窓が設置され、建物内全体に光が取り込まれるように工夫されている。さらに、窓から美しい外の景色を楽しめるのも魅力的だ。館内は明るく、無料スペースであるので、カフェや図書館など気楽に立ち寄りやすい雰囲気が出ている。またワークショップや市民ギャラリーによって、地域の人々が芸術に親しむ機会を提供しているのも注目すべき点だ。府中市美術館には、たいへん珍しいとりくみとして「公開制作」の場所が設けられている。公開制作とは作家を招き、その場で作品を制作して、その様子を利用者が目に見ることができることである。作品の制作過程という普段は見ることの不可能な創造の現場を体験できるのはたいへん貴重である。

以上が一階であるが、受付の横にあるエスカレーターを上にあがると二階の展示室になる（ちなみに二階は有料スペースである）。二階の展示スペースは極力光を排除しているので、全体的に薄暗い空間である。大きく分けて企画展示室と常設展示室、そして牛島憲之記念館の三つからなる。

常設展は府中市および多摩地区にゆかりのある作家や将来性のある若手作家の作品、国内外の近代以降の作品などを展示している。室内は広く開放感があり、作品も間近で鑑賞することが可能である。

そして「牛島憲之記念館」では、開館時に遺族から寄贈された洋画家牛島憲之氏の100点ほどの作品（実際の展示では、100点はなかったのが定期的な展示替えをしているようだ）を見ることができる。牛島憲之氏のアトリエを再現した展示もあり、資料も公開されていて興味深い。だが、入口はやや入りくんでおり順路が分かりにくい感がある。

最後に企画展示室であるが、「春の江戸絵画まつり かわいい江戸絵画」が開催中であった。作品内容もたいへん興味深いのが、とくに関心を引かれたのは展示方法だ。作品の解説には詳細が記載され、子供でも読めるように文章にふりがなが付けられている。また、作品それぞれに細やかな工夫が施されている。例えば、ガラスケースに入っているものには、作品にあてる光を広範囲に散らすことで少しの光でも見やすくしていた。他にも、作品の見落としを防ぐために、矢印が描かれた看板を設置していることも注目したい。

冒頭でも述べたが、府中市美術館はまさに市民の生活にとけこんでいる。筆者は美術館によく足を運ぶほうだが、観察して思うのは利用者が成人しかいないことだ。子供の姿、ましてや身障者の姿を見ることはほとんどない。これは子供向けの展示内容やバリアフリーが不十分な美術館が多いことに一因があるだろう。しかし、この点、府中市美術館は改善している。建物内がバリアフリーであるのはもちろんだが、ベビーカーや車いすの貸し出しを行っているのだ。他にも子供に向けて簡単

なクイズが用意されていたり、展示作品を用いた菓が作成できたりと、楽しめる工夫が随所に見てとれた。さらにイメージ・キャラクターである「ぱれたんとむら田」のかわいいグッズも販売している。ぱれたんとむら田は開館当時に生みだされたキャラクターで、夏休みの展覧会の子供用のキャラクターだったそうだ。当初、グッズは無かったそうだが、館長の井出先生にお伺いしたところ、3～4年前にネットで開催された「ミュージアム・キャラクター・コンテスト」で全国二位に選ばれたのを機に、グッズ販売を始めたそうだ。

つまり、府中市美術館はもじどおり、老若男女をとわず利用できる美術館として、たえずさまざまな取り組みをおこなっているのだ。



当日、ご多忙のなかお時間を割いていただき、見学実習を可能にしていただいた府中市美術館館長井出洋一郎氏には心より御礼申し上げたい。

■ 春学期の基礎実習は、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた（専任教員1名、兼任講師2名）。必要な基礎的修練は相応に果たし得たと考えている。

■ 夏季の学外実習は、以下の19館で行われた（順不同）。

大倉集古館 千葉市美術館 ふじみ野市立大井郷土資料館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 東京江戸東京博物館
練馬区立石神井公園ふるさと文化館 損保ジャパン東郷青児美術館 神奈川県立博物館 山崎美術館 日本カメラ博物館
NHK放送博物館 町田市郷土博物館 古代オリエント博物館 練馬区立美術館 久喜市立郷土資料館 三芳町立歴史民俗資料館 清瀬市郷土博物館 福島県立美術館 東玉人形博物館



各館にはいつもながら懇切丁寧なご指導とご便宜を賜った。あらためて厚く御礼申し上げたい。

■ 秋学期は、夏季の学外実習での体験を活かしつつ、学期末の花蹊記念資料館での模擬展示のための企画立案を行う。民俗・歴史、美術の二専攻、二班に分かれ、展覧会の実施計画を練り上げる。卒業論文提出（12月中旬）の時期と重なり、履修生は多大の労苦を強いられることになるが、粘り強い奮闘と協力によって、難局を乗り切ることができた。

博物館実習自主企画展示

会 期 平成20年1月24日(火)～2月8日(土)
場 所 跡見学園女子大学花隈記念資料館
開館時間 9:30～16:30 (日曜は休館)
入館者数 198名

I 「女学生」ごきげんよう、ハイカラさん。 第一展示室

担当学生名 加藤敦子 北村文乃 木村紀香 小杉郁美 捧 苑生 鈴木ありさ 鈴木由似
須原菜穂子 田口祥子 仲村有莉 平山 睦 益子諭美 宮本祐香里

ごあいさつ

みなさんは跡見学園といわれて何を思い浮かべますか？

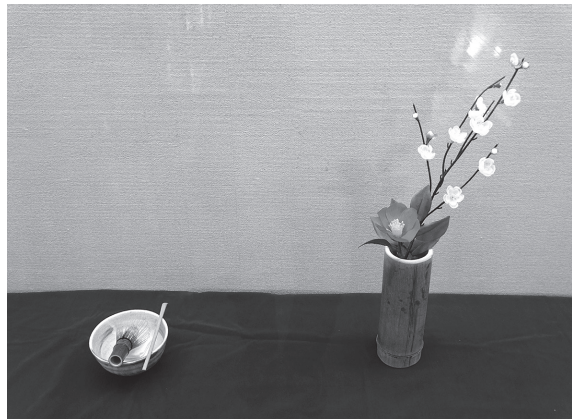
桜・良妻賢母・「ごきげんよう」の挨拶……。色々思い浮かんでくるとと思います。そんな跡見学園は来年で創立140周年を迎えます。140年前、私たちの先輩たちは、最前線の流行を捉えた「ハイカラさん」ファッションの先駆けになっていました。

跡見女学校に通っていた女学生たちは、気品溢れる紫袴に2尺袖の着物に身を包み、編み上げブーツで学園に学びに来ていました。当時、学園で行われていた授業は他の学校とは違う一風変わった独特な教育システムを採用し、大きな話題になっていました。

そこで私たちは当時の女学生の生活について知ってもらいたいと考え、今回の展覧会を作りました。

当時の女学生のハイカラスタイルと授業風景を再現した立体展示を中心に、当時の女学生の生活を展示しています。

伝統ある跡見学園について、新しい発見や共感をここで見つけて頂けたらと思います。



II 「踊る」 第二展示室

担当学生名 鵜殿晶代 大塚ありさ 岡野靖子 齊藤詩織 鮫島加帆里 鈴木咲紀 野口梨紗
平澤愛美 平山 睦 蓬田優歩

ごあいさつ

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。

本展覧会は、博物館実習の集大成として実習生一同が企画、考案したのになります。西洋と日本の二部構成になっています。あまりにも広大な構成と思われるかもしれませんが、しかし【踊る】という一点に限るなら、両者はともに普遍的な「人を楽しませる」エンターテインメントとしての要素を少なからず持っています。この「楽しさ」「面白さ」を絵や像にして表す作者たちの力量。容易にとらえがたい精妙な人体の動きを、なんとか表現しようと懸命になったであろう描き手たちの苦闘の跡。そして【踊る】ことに伴う人の躍動感や生命力にあふれるカタチの面白さ。これを是非堪能していただきたく、この展覧会を開催いたしました。

立案や運営に関して、素人同然ながらも試行錯誤して開きました本展ですが、至らぬ点多々あるかとは思いますが、これを温かい目で最後までご鑑賞頂けたら、望外の喜びであります。

我々一同4年間美術に触れて参りましたが、やはりその奥は深く、見通せないものばかりです。そのような私どもですが、今回展覧会を自身の手で開くにあたり、柱となる信念を掲げました。それが、「美術はおもしろい」ものであるということであり、この信念こそ、この4年間の集大成でもあるのです。このメッセージを、せめて少しでも自分たちの手で発信できればと思っています。

今回展覧会を開催するにあたりご協力頂いた関係者各位様、ご助力頂いた先生方、会場をご提供下さいました花蹊記念資料館の皆さまに、心より感謝の意を申し上げます。

どうぞ、ひと時の美術空間をお楽しみくださいませ。

